

『情報科学研究』論文執筆要項

(原稿の様式)

第1条 原稿は日本語の横書きで記述する。

2. 原稿は、B5 版用紙1枚に44字/行×41行(字数は全角文字数)を目安とする。
3. 論文原稿は20枚程度、研究ノートの場合は15枚程度、書評の場合は10枚程度を目安とする。ただし、いずれの場合も特に厳密な制限とはしない。
4. 投稿にあたってはワードプロセッサ原稿と共に、3.5インチ2HDまたは2DDのフロッピーディスクに格納したWordのファイルを添付すること。Wordファイルは、数式や表等をそのまま印刷できるように書体や書式を設定する。

(原稿の体裁)

第2条 原稿の1枚目には、投稿した内容を表す題名と著者名、所属を日本語と英語で併記し、著者の連絡先住所と電話番号を記述する。

2. 原稿の2枚目には題名と英文の要旨、キーワードを記述する。英文要旨は150ワード程度とし、キーワードは5つ程度とする。なお、キーワードは英語も併記する。
3. 原稿の本文は3枚目から始め、ここを1ページとして以下通し番号を付ける。
4. 原稿は本文、(必要があれば)謝辞、注、参考文献、(必要があれば)付録の順で構成する。
5. 本文は章、節、項の区別を明確にし、それぞれに通し番号を付ける。

(原稿の表記法)

第3条 図表には、それぞれ通し番号と表題を付ける。また、数式にも通し番号を付ける。

2. 注は当該文末に肩付き注¹⁾を付け、本文の後にまとめて番号順に記述する。
3. 人名は原則として原語で表記する。ただし、広く知られているもの、また印刷が困難なものに関してはこの限りではない。
4. 文献を本文中で引用する場合は“著者名 [発行年]”または“著者名 [発行年, 参照ページ]”のように記す。同姓の著者の文献を引用する場合は“姓名”と記し、同姓同名の著者の文献を引用する場合は“著者名 (所属機関)”と記す。また、同じ著者の同一年の文献を複数引用するときは、発行年にアルファベットを付ける。

(例) 山田 [1997, p. 128] によれば……

鈴木 [1990] はこの分野における……

小山一郎 [1989] と小山五郎 [1993] は、この点にかんして……

大山太郎 (専修大学) [1994] と大山太郎 (JCN 研究所) [1992] の相違は……

小山 [1995a, 1995b] によれば、オブジェクト指向……

5. 参考文献は、本文中に引用したもののみを最後に一括して記述する。日本語文献は著者名の50音順に、欧文文献は著者名のアルファベット順に配列する。
6. 参考文献は以下の書式に従って記述する。
 - ① 和雑誌：著者名、「論文名」、『雑誌名』、巻数、号数、発行年月日、掲載ページ。
(例) 山田太郎、「DSSの現状」、『情報科学研究』、第3巻、第2号、1992年4月、10-20ページ。
 - ② 和著書：著者名、『書籍名』、出版社、発行年。
(例) 山田太郎、『DSSの現状と展望』、JCN出版、1993年。
 - ③ 和編著：著者名、「論文名」、編著者名『書籍名』、出版者、発行年、掲載ページ。
(例) 山田太郎、「DSS」、鈴木一郎編『情報システムの変遷』、JCN出版、1995年、123-147ページ。
 - ④ 洋雑誌：著者名、“論文名”、雑誌名、巻数、号数、発行年月日、掲載ページ。
(例) Smith, J., “An Introduction to DSS”, *DSS Journal*, Vol. 3, No. 2, April 1992, pp. 108-126.
 - ⑤ 洋著書：著書名、書籍名、出版社、発行年。
(例) Smith, J., *The Development of DSS*, DSS Press, 1993.
 - ⑥ 洋編著：著者名、“論文名”、編著者名、書籍名、出版者、発行年、掲載ページ。
(例) Smith, J., “The Principle of DSS”, Jones, D. (ed.), *History of DSS*, DSS Press, 1997, pp. 323-359.
7. その他、疑義がある場合は、一般に広く認められている書式を一貫して使用すること。